

新版『資本論』第8回講義 第4篇 相対的剰余価値の生産

第13章 機械と大工業

主催：千葉県学習協

場所：自治体福祉センター4階会議室

日時：2023年1月15日（日）午後1時00分～5時00分

講師：萩原伸次郎（横浜国立大学名誉教授）

第13章 機械と大工業

第1節 機械の発展

「機械は、剰余価値の生産のための手段である」（新版③、652頁、新書版、643ページ、原文、391ページ）

「すべての発展した機械は、三つの本質的に異なる部分、すなわち、原動機、伝道機構、最後に道具機または作業機から、成り立っている」（新版③、655頁、新書版、646ページ、原文、393ページ）

「機械のこの部分、すなわち道具機こそが、18世紀産業革命の出発点をなすものである。道具機は、手工業経営またはマニファクチュア経営が機械経営に移行するたびごとに、いまなお毎日あらためて出発点となっている」（新版③、656頁、新書版、647ページ、原文、393ページ）

作業機の特徴：人間の道具ではなく機械的道具という性格→ジェニー紡績機（最初から12～18錘の紡錘で紡ぐ。「蒸気機関そのものは、産業革命を呼び起こしはしなかった。むしろその逆に、道具機の創造こそが、蒸気機関の変革を必然にしたのである」（新版③、659頁、新書版、650ページ、原文、396ページ）

作業機の規模と数の増大→大規模な原動力の必要（馬力、風力、水力、ワットの複動式蒸気機関）（新版③、661～663頁、新書版、652～3ページ、原文、396～8ページ）→伝道機構の改革・拡大

多数の同種の機械の協業（封筒製造機による封筒製造）と機械体系（編成された機械体系では、部分機械相互の絶え間のない連動が、それらの数、大きさ、速度の間に一定の比率を作り出す）（新版③664～668頁、新書版、655～658ページ、原文、398～401ページ）

自動的な原動機によって作業機が運転されるようになる→自動装置の出現・機械的怪物（新版③669～671頁、新書版、659～660ページ、原文、402ページ）

機械製作マニファクチュアによる機械製作、その間は、大工業は、その十分な発展を麻痺させられていた。機械化は、手工業的基礎と衝突する。機械化は、どんどん他部門

に進出していく。そうすると、機械製作は、マニュファクチュアにおける生産では間に合わなくなる（新版③、671 頁、新書版、661~664 ページ、原文、403~405 ページ）

19 世紀の最初の数十年間、機械による機械の生産によって大工業は、自分自身の足で立った。そのためには、完全に統御可能な原動機が必要だった。

第2節 生産物への機械の価値移転

「不変資本の他のどの構成部分とも同じように、機械設備はなんら価値を創造しはせず、自分が、その生産の役に立つ生産物に自分自身の価値を引き渡す」（新版③679 頁、新書版、669 ページ、原文、408 ページ）

ここで注意：「機械設備は労働過程にはいつも全部的には入り込むが、価値増殖過程にはつねに部分的にのみは入り込む、ということ」（新版③680 頁、新書版、970 ページ、原文、408 ページ）

労働する場合、機械は全面的に生産過程において使われる（使用価値的に）だが、その価値は、日々の平均的摩滅に比例して生産物に移転するということ。

機械の日に生産物に移転される価値部分が、「それを高価にする程度は、まず、第一に生産物の範囲に、生産物の面積に依存する。」（新版③682 頁、新書版、672 ページ、原文、409 ページ）ということは、生産物がたくさんになれば、一個当たりに吸収される機械設備の価値は小さくなるということ。具体例：新版③682 頁、新書版、672 ページ参照。

また生産物の総量は、作業機の速度に依存する。そして、移転される価値部分の大きさは、機械装置自身の大きさに依存する。（新版③683 頁、新書版、673~4 ページ、原文、410~9 ページ）

機械の生産性：「機械が人間労働力に取って代わる程度によって測られる」（新版③686 頁、新書版、676 ページ、原文、412 ページ）具体例：自動ミュール紡錘の場合 366 重量ポンドの綿花が 150 労働時間で糸になるが、紡車の場合、2 万 7000 労働時間かかる。捺染、綿繰りの例

「蒸気機関は蒸気犁の場合には 1 時間に 3 ペンスすなわち 0.25 シリングの費用で、66 人の人間が 1 時間あたり 15 シリングの費用ですると同量の仕事をする」（新版③689 頁、新書版、678 ページ、原文 413 ページ）15 シリングは労働者に払われた賃金分だから、実際に生産された価値より小さい。だから、「機械そのものに対象化された労働は、つねに機械によって置き換えられた生きた労働よりもはるかに小さいのである」（新版③689 頁、新書版、679 ページ、原文、414 ページ）生きた労働には、剰余価値部分が含まれているからである。

「資本にとっては、機械の使用は、機械の価値と機械によって置き換えられる労働力の価値との差によって限界づけられる」(新版③690 頁、新書版、679 ページ、原文、414 ページ) つまり、機械の値段が、それに取って代わられる賃金よりも大きければ、機械は導入されない。

第3節 労働者におよぼす機械経営の直接的影響

a 資本による補助労働力の取得。婦人労働および児童労働

機械が筋力を不要にする→婦人労働・児童労働

「夫の労働力の価値を彼の全家族が分担するようにする」→搾取度の拡大

「資本は、児童や未成年者を買う」。「いまや労働者は、妻子を売る」。「乳幼児期における労働者児童の異常に高い死亡率」。資本主義は公教育を破壊する。工場監督官による報告書

b 労働日の延長

労働生産性を高める機械設備は、労働日を延長する手段となる。なぜか？

- ①. 労働手段の運動が労働者に対して自立する。労働者は奴隷。
- ②. 機械設備の機能する期間が長ければ長いほど、機械設備によって付け加えられる価値がそれだけ多くの生産物に配分され、移転される個々の価値部分が小さくなる。
- ③. 機械の摩滅は、決して厳密に利用時間に対応するわけではない。また対応すると仮定しても、7年半で使い切る機械と15年間で使い切る機械とでは、前者のほうが同量の剰余価値を半分の時間で飲み込んでしまう。
- ④. 物質的摩滅と社会基準上の摩滅によって、時間が経つと、機械は自然と価値を減じる。
- ⑤. 労働日を延長すれば、機械設備と建物へ支出される資本部分是不変でも生産の規模は拡大できる。
- ⑥. 特別剰余価値の獲得。
- ⑦. 機械設備は、労働者数を減らす→剰余価値の減少→剰余価値の減少を食い止めるために労働日を延長する。
- ⑧. 機械によって過剰人口が生まれ、人々は資本に従順になる。

c 労働の強化

労働日の延長には限度があるし、社会の反作用を導き出す。そこで、資本は、労働の強化に乗り出す。<労働の生産力の増大>と<労働の強化>はどう違うのか？

同じ時間内における労働支出の増加、労働力の緊張の増大、労働の凝縮→10時間労働日のより集約的な1時間は、12時間労働日中のいっそう粗放ない時間と同じかそれ以上の価値をうむ。だが、いかにしてそれは可能か？

- ① 「労働の作用能力はその作用時間に反比例する、という自明の法則にもとづく」(新版③720 頁、新書版、709 ページ、原文、433 ページ) 労働の作用能力×作用時間

＝一定、つまり、作用時間が10%短縮されれば、能力が10%増大し、作用結果は同じになるという法則。つまり、賃金を一定として、労働時間を短縮すると、労働能力のよりいっそうの発揮で同じ分量の生産物を作るということ。実験は成功。

- ② 機械の速度の増大と同じ労働者に監視させる機械設備の範囲、作業場面の範囲を拡大する。工場主たちの富の増大。具体的歴史的事実は、新版③723～731 頁、新書版、713～721 ページ、原文、435～439 ページ。

結果：「労働日の短縮がすでに労働者の健康、したがって労働力そのものを破壊する労働の強度を生み出している」（新版③、732 頁、新書版、721～2 ページ、原文、439 ページ）。

第4節 工場

「完成された姿態における工場全体に目を転じよう」主体であった労働者が、資本主義的機械の充用では、その付属物となる。（新版③735 頁、新書版、725 ページ、原文、441 ページ）

自動化工場での分業→主要労働者と助手・下働き（新版③、737～738 頁、新書版、726～7 ページ、原文、443～444 ページ）

工場全体への、すなわち資本家への労働者のどうしようもない従属が出現する。（新版③、740～742 頁、新書版、730～732 ページ、原文、445～446 ページ）工場体制において手工労働者と労働監督者との労働の分割が現れる。（新版③、743 頁、新書版、732 ページ、原文、447 ページ）工場法典：「奴隷酷使の鞭に代わって、監督の処罰名簿が現れる」（新版③、744 頁、新書版、733 ページ、原文 447 ページ）

第5節 労働者と機械との闘争

「資本家と賃金労働者とのあいだの闘争は、資本関係そのものとともに始まる。それは、全マニュファクチュア時代を通じて荒れ続ける。しかし機械の採用以後にはじめて、労働者は、資本の物質的な実存様式である労働手段そのものにたいしてたたかう」（新版、③751 頁、新書版、740 ページ、451 ページ）機械打ちこわし・ラダイト運動

マニュファクチュア時代の労賃をめぐる諸闘争は、手工業的経営は、分解されずにとどまるので、マニュファクチュアの存在にたいしてなされているのではない。（新版③、754～755 頁、新書版、743～744 ページ、原文、452～454 ページ）

だが、機械が導入されると、労働手段は、労働者そのものの競争者となる。なぜか、

機械による資本に自己増殖／機械によって生存条件を破壊される労働者数＝一定
機械による手工業者の没落：イギリスの手織工（徐々に没落し 1838 年に完全に破滅）
インドの手織工（急速に没落「この窮乏は、商業史上ほとんどその類例を見ない。木綿織布工の骨は、インドの平原を真っ白にしている」）（新版③、756～757 頁、新書版、745～6 頁、原文、454～5 ページ）

「労働手段が労働者を打ち殺す」「大工業そのものの内部においても、機械設備の絶え間

のない改良および自動大系の発達とは、類似の作用をする」「自動体系においては、労働者の才能はますます駆逐される」「機械設備の飛躍的改良と、それに応じた手労働の駆逐」イギリス綿工業におけるアメリカ南北戦争（1861-65年）に基づく機械の改良とその成果

ユアの『工場の哲学』における「工場精神の典型的表現」機械は、労働者たちの利益になるのだ。機会は成人労働の賃金減少につながると非難されるが、児童労働の賃金率の上昇につながる。（新版③、759～768 頁、新書版、748～757 ページ、原文、455～461 ページ）。

第6節 機械によって駆逐された労働者にかんする補償説

「一連のブルジョア経済学者たちは、いずれも、労働者たちを駆逐するすべての機械設備が、いつの場合も同時にまた必然的に、まったく同じ労働者たちを就業させるのに十分な資本を遊離させる、と主張している」（新版③、769 頁、新書版、758 ページ、原文 461 ページ）

現実には起こっていること→可変資本から不変資本への転化 機械の改良と共に資本が就業させる労働者は少なくなる。

新しい機械設備の製作に機械工が必要だとしても、壁紙製造所で解雇された数だけの労働者を雇い入れることは不可能

ブルジョア経済学者は何を言っているのか？ 労働者を解雇した分、彼らが消費していた生活諸手段が遊離することを言っている。そして、遅かれ早かれ新たな投資口がみつき、資本と労働者は再会する。そのときに補償がおこなわれる。

しかし、現実には、生活手段が遊離される。つまり売れなくなるから、市場価格が下落し、資本がまた遊離する。また失業者が生み出されるということになるだけ。投資口を求める新しい追加的資本があって初めて仕事を見つけることができるのである。（新版③、770～774 頁、新書版、759～762 ページ、原文、462～464 ページ）

機械は、それ自体、労働者の解雇に責任がない。ナイフによる殺人に、ナイフに責任がないのと同じ。ナイフによる殺人が起こるからナイフをこの世から追放せよというのは、ナンセンス。機械を追放せよというのは、社会的進歩の敵なのだ。（新版③775～776 頁、新書版、763～4、原文、465～466 ページ）

機械は、それが採用される労働部門では雇用を減らすが、他の労働部門で増大させる場合がある。

- ① 機械による生産物は、大量に生産されるから、その部門に生産手段を供給する他の諸部門の生産が拡大され、雇用も拡大する。（新版③777～778 頁、新書版、765～7 ページ、原文、466～7 ページ）
- ② 紡績業の機械化が手織工の仕事を増やす。（新版③779～780 頁、新書版、768 ページ、原文 468 ページ）
- ③ 社会的生産部門の多様化による需要増。（新版③、780 頁、新書版、769 ページ、原

文、468 ページ)

- ④ 新生産部門の形成。(新版③、781 頁、新書版、770 ページ、原文、469 ページ)
- ⑤ 非生産部門、「召使階級」の肥大化(新版③782~783 頁、新書版、771 ページ、原文、469~70 ページ)

第7節 機械経営の発展にともなう労働者の反発と吸引。綿業恐慌

「機械は、その採用期および発展期の恐怖ののちには、労働奴隷を最終的には減少させないで、結局はこれを増加させる、ということである！」(新版③、781 頁、新書版、773 ページ、471 ページ) もちろん、労働者数が絶対的にも減少する場合がある。(新版③、786 頁、新書版、774~5 ページ、原文、471~2 ページ)

しかし、機械経営自身の成長によって、「工場労働者が、彼らに駆逐されたマニファクチュア労働者やあるいは手工業者よりも結局は多数になりうる」(新版③、788~789 頁、新書版、776~778 ページ、原文、473~4 頁)

この点についての事実的関係の叙述

- ① 工場制度の普及、機械による機械の生産、石炭・鉄・金属の加工・運輸制度の変革
→工場制度の突発的に飛躍・拡大→限界は販売市場と原料のみ 世界市場がイギリス資本の利害のもとに編成替えされる。(新版③、790~791 頁、新書版、778 ページ、原文、474~475 ページ)
- ② 工場制度の発展、世界市場への依存→熱病的生産と市場の拡充・産業循環が現れる
(新版③、794~798 頁、新書版、782~786 ページ、原文、476~479 ページ)
そして綿花飢饉(新版、799~803 頁、799 頁、新書版、787~791 ページ、479~482 ページ)

第8節 大工業によるマニファクチュア、手工業、および家内労働の変革

a 手工業と分業にもとづく協業の排除

「機械は、手工業にもとづく協業と手工業的分業にもとづくマニファクチュアとを排除する」(新版③、806~807 頁、新書版、794~796 ページ、原文、483~485 ページ)

b マニファクチュアおよび家内労働におよぼした工場制度の反作用

「このいわゆる近代的家内工業は、独立の都市手工業、自立した農民経営、とりわけ労働者家族の家を前提とする古い型の家内工業とは、名称以外なんら共通するものをもたない。それは、いまでは、工場、マニファクチュア、または問屋の外業部に転化している」 近代的マニファクチュアは、本来の工場におけるよりもいっそうは恥知らずなものとなる。

(新版③、808~810 頁、新書版、797~8 ページ、原文、485~6 頁)

c 近代的マニファクチュア

第8章「労働日」において学んだ。具体的な事例。

d 近代的家内労働

釘製造工場、レース生産、

e 近代的マニュファクチュアおよび近代的家内労働の大工業への移行。それらの経営諸生産様式への工場法の適用によるこの変革の促進

「分散した家内労働（あるいはマニュファクチュアも）工場経営に急転化させるときが告げられる」（新版③、823 頁、新書版、811 ページ、原文、494 ページ）
服装品の生産の場合、市場の拡大についていけない手工業→ミシンの登場 工場法の規制 労働日の制限

第9節 工場立法（保健および教育条項）。イギリスにおけるその一般化

「工場立法、すなわち社会が、その生産過程の自然成長的姿態に与えたこの最初の意識的かつ計画的な反作用は、……大工業の必然的産物である」（新版③、840～841 頁、新書版、828 ページ、原文、505 ページ）

保健条項 教育条項

*この箇所は、マルクスが 1866 年 1 月から開始した完成稿作成過程において付け加えられたと推定される。

まず、保健条項は、貧弱なものであるといいながら、そこでの強制の重要な意味をマルクスは論じている。「資本主義的生産様式には、もっとも簡単な清潔・保険設備さえ、国家の強制法によって押し付ける必要があるということ、これ以上にこの生産様式をよく特徴づけるものがほかにあるだろうか？」（新版③842 頁、原文 505～506 頁）

「工場法の教育条項は、全体として貧弱に見えるとはいえ、初等教育を労働の義務的条件として宣言している」（新版③844 頁、原文 507 頁）

ロバート・オウエンを高く評価し、マルクスは次のように言う。

「工場制度から未来の教育の萌芽が芽生えたのであり、この未来の教育は、社会的生産を増大させるための一方法としてだけでなく、全面的に発達した人間をつくるための唯一の方法として、一定の年齢以上のすべての児童にたいして、生産的労働を知育および体育と結びつけるであろう」（新版③844～845 頁）。

近代的工業は、人間発達の全面性にかかわる。「大工業は、労働の転換、それゆえ労働者の可能なかぎり「の多面性を一般的な社会的生産法則として承認し、そしてこの法則の正常な実現に諸関係を適合させることを、自己の破局そのものを通じて、死活の問題とする」（新版③、850 頁、新書版 838 頁、原文、512 ページ）

資本主義は、古い家族関係を解体させる。

「大工業が古い家族制度とそれに照応する家族労働との経済的基礎と共に、その古い家族関係そのものを解体する」(新版③854 頁)

ジェンダー平等に基づく社会の経済的基礎を資本主義制度は創り出す。

「資本主義制度の内部における古い家族制度の解体が、どれほど恐ろしくかつ厭わしいものに見えようとも、大工業は、家事の領域のかなたにある社会的に組織された生産過程において、女性、年少者、および男女の児童に決定的な役割を割り当てることによって家族と男女両性関係とのより高度な形態のための新しい経済的基礎を作り出す」(新版③、855 頁、新書版、842~3 ページ、原文、513~4 頁)

工場法がすべての社会的生産の法律に一般化する必要性は、大工業の歴史的発展経路から生じる

「工場法の一般化」→「社会的規模での結合された労働過程への転化」→「資本の集中と工場体制の専制」。しかし「工場立法の一般化は、生産過程の物質的諸条件および社会的結合と共に、生産過程の資本主義的諸矛盾と敵対とを、それゆえ同時に新しい社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる」(新版③、877 頁、新書版、864 ページ、原文、526 ページ)

ロバート・オウエンへの高い評価→「彼は、自分の試みにおいて実際に工場制度から出発しただけでなく、理論的にも工場制度を社会革命の出発点であると宣言した」(新版③878 頁)

第10節 大工業と農業

機械の使用は労働力の過剰をうみだす。

「たとえば、ケンブリッジ州、サフォーク州では、耕地面積は、最近 20 年以来非常に拡大したが、他方、農村人口は同じ時期に相対的のみならず絶対的にも減少した」(新版879~880 頁、新書版、866 ページ、原文、527 ページ)

にもかかわらず、「土地の収穫が、使用労働者数の増加に比べて、逡減的な割合で増加する」という収穫逡減の法則が「学派的ドグマ」としてまかり通っている。土地の収穫を C、使用労働者数を L とすると逡減的割合で増加する、を式で表せば、

$$dC/dL > 0 \quad d^2C/dL^2 < 0$$

となるが、現実はそのようなということ。「資本主義的農業のあらゆる進歩は、単に労働者から略奪する技術における進歩であるだけでなく、同時に土地から略奪する技術における進歩でもあり、一定期間にわたって土地の肥沃度を増大させるためのあらゆる進歩は、同時にこの肥沃度の持続的源泉を破壊するための進歩である」(新版③、881 頁、新書版、868 ページ、原文、529 ページ) アメリカ合衆国に例をマルクスは上げているが、21 世紀の今日から見ても、マルクスの見解は、卓見である。土地の収穫は、逡減的

ではなく、通増的でしたらあった。

資本主義的生産様式は、・・・「あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規則的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、その体系的に再建することを強制する」(新版 881 頁、新書版、868 ページ、原文、528 ページ)
環境破壊に立ち向かう環境保護運動の重要性!!